

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

豊臣秀吉の全国統一

これまで^{かまくら}鎌倉時代のことを見てきましたが、ここで、時代を下って^{あづちももやま}安土桃山時代の出来事を見てみましょう。

百年以上続いた^{せんごく}戦国時代も終わりに近づいた^{てんしょう}天正18(1590)年、すでに中部～西日本を支配下におさめていた^{とよとみひでよし}豊臣秀吉は、^{おだわら}小田原(神奈川県小田原市)に本拠を置く^{ほうじょう}北条氏を滅ぼしました。北条氏は、当時関東地方の大部分を支配していた有力な大名でした。そのため、まだ秀吉に従っていなかった関東地方・東北地方の大名たちも、つぎつぎと秀吉のもとにやってきて服従を約束したので、ここに秀吉による全国統一が完成しました。

秀吉は小田原から^{あいづくるかわ}鎌倉を経て会津黒川(福島県会津若松市)に向かいましたが、その途中宇都宮城に約10日滞在し、関東・東北地方の大名の配置を決定する^{うつのみやしおき}「宇都宮仕置」を行ないました。「仕置」とは、当時のことばで、征服した土地の支配体制を決定することをいいます。

豊臣秀吉による全国統一という歴史の大きな節目で、宇都宮城が大きな役割を果たしたのです。

それでは「宇都宮仕置」とはどういうものだったのでしょうか。(つづく)

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

秀吉の小田原征伐

^{とよとみひでよし}豊臣秀吉は、1580年代になると、大坂城（大阪府大阪市）を築いて本拠とし、東海・北陸地方から九州・四国地方に及ぶ広い範囲をその支配下に納めていました。

そのなかで、^{おだわら}小田原（神奈川県小田原市）に本拠を置く^{ほうじょう}北条氏が秀吉に従わない最大の勢力になっていました。秀吉は、北条氏と^{さなだ}真田氏の対立に介入し、両者が攻防を繰り返していた^{こうづけ}上野国（群馬県）の境界画定を行いました。その際に、^{ぬまた}沼田城（群馬県沼田市）を北条氏に、^{なくるみ}名胡桃城（群馬県^{つきよの}月夜野町）を真田氏に与えたのです。

沼田城と名胡桃城は^{とね}利根川を挟んだ目と鼻の先にあり、いずれは衝突が起こることは火を見るより明らかでした。^{てんしょう}天正17（1589）年沼田城にいた北条氏の家臣・^{いのまたくにのり}猪俣邦憲は、名胡桃城を攻め落として^{じょうだい}城代・^{もんど}鈴木主水を自害に追い込みました。

秀吉は、北条氏が境界画定に背いて真田領を侵略したとして、全国の大名を動員して北条氏を攻撃することになりました。これを「^{おだわら}小田原^{せいばつ}征伐」と呼んでいます。（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

宇都宮氏、秀吉に服属

豊臣秀吉の小田原攻めは大規模なものでした。秀吉の命令で集合した大名は徳川家康・前田利家など多数，人数は20万人以上とも言われています。

秀吉は，関東・東北地方の大名にも小田原への集合を命じましたが，これは秀吉に服属するかどうかを試すためのものです。^{だてまさむね}伊達政宗など東北地方の大名も次々に秀吉のもとにやってきました。

宇都宮城主・宇都宮国綱^{くにつな}も小田原へ駆けつけています。

^{まついだ}松井田城（群馬県松井田町）・^{はちがた}鉢形城（埼玉県寄居町）・^{はちおうじ}八王子城（東京都八王子市）・^{やまなか}山中城（静岡県三島市）など北条氏の城は次々と落城。本拠地小田原城を取り囲まれた当主・^{ほうじょうしなほ}北条氏直はついに降伏し，北条氏は滅びました。

北条氏を滅ぼした後，秀吉は服従を誓った大名の領地を^{あんど}安堵（従来の領地の領有を認めること）するとともに，自分に従わない大名に^{かいえき}改易（取り潰すこと），^{げんぼう}減封（領地を減らすこと）などの処分を次々に行いました。この処分は，これまで，小田原に参陣したかしないかが処分の分かれ道になったとされてきましたが，最近の研究では，秀吉が小田原から会津に向かう途中，宇都宮城滞在時の出来事も重要であったと言われています。（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

宇都宮仕置

ここからは、福島大学の小林清治先生の研究成果を参考に見ていきましょう。

^{とよとみひでよし}豊臣秀吉は、^{てんしょう}天正 18 (1590) 年 7 月 17 日 ^{おだわら}小田原を出発し、^{かまくら}鎌倉（神奈川県鎌倉市）・^{えど}江戸（東京都）を経て、7 月 26 日に宇都宮へ到着しました。この後、8 月 4 日まで滞在し、関東・東北の大名を次々と引見して、その処分を行っています。

秀吉は、「東北地方は言うまでもなく、^{えぞがしま}蝦夷島（北海道）までも処分を行う。自分のもとに来ない大名は、ことごとく滅ぼしてしまうつもりだ。」と強い決意を述べています。

すでに小田原で秀吉に会っていた^{でわ よねざわ}出羽国米沢（山形県米沢市）の伊達^{だて}政宗、^{まさむね}出羽国山形（山形県山形市）の^{やまがた}最上義光、^{もがみよしあき}陸奥国（青森県）^{むつ}三戸の^{さんのへ}南部信直など、東北地方の有力な大名も、宇都宮であらためて秀吉に会い、領地の決定をされるとともに、人質を差し出すなど数々の指示を受けています。

一方、^{あきた}出羽国秋田（秋田県秋田市）の^{あんどうさねすえ}安藤実季、^{おだか}陸奥國小高（福島県小高町）の^{そうまよしたね}相馬義胤などは、小田原へは行かなかったのですが、宇都宮で秀吉に会って服従を誓い、領地の領有を認められました。

つまり、戦場である小田原へ駆けつけることなく、宇都宮で秀吉に会うことによって大名としての地位を認められたのです。これは、宇都宮へ来るかどうかは処分の重要な判断基準になっていたことを示しています。（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

宇都宮仕置の明暗

のちに江戸幕府の初代将軍となる^{とくがわいえやす}徳川家康は、^{えど}江戸を本拠地として関東地方を領有することを、すでに^{おだわら}小田原で^{とよとみひでよし}豊臣秀吉から内示されていましたが、7月29日に宇都宮であらためて秀吉に会い、最終的な指示を受けています。

その後8月1日に江戸に到着しましたが、この日が後世「8月1日の江戸打ち入り」と呼ばれ、家康が公式に江戸に入った日として認識され、江戸幕府の記念日になっていくのです。

したがって、宇都宮仕置は、その後の江戸時代の幕開けにとっても、記念すべき意味をもつものといえるでしょう。

一方、宇都宮に来なかったために、領地を取り上げられ、^と取り潰され^{つぶ}てしまった大名もいます。

^{しもつけ}下野国北東部を支配していた戦国大名・^{なすすけはる}那須資晴は、^{おだわら}小田原へ行かなかったばかりか、宇都宮までわずか一日の距離である^{からすやま}下野国烏山（烏山町）にいたにもかかわらず、病気のために秀吉に会いに来ませんでした。秀吉は^{あいづ}会津に向けて出発する間際まで待っていましたが、ついに領地没収を命じたのです。

このように、宇都宮に来て秀吉に忠誠を誓うことが、大名として存続できるかどうかの分かれ道になったのです。（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

重要視された宇都宮

^{とよみひでよし}豊臣秀吉は、8月4日に宇都宮を発ち、^{あいづ}会津に向かいました。^{しらかわ}白河（福島県白河市）を經由して9日に^{あいづくるかわ}会津黒川（福島県会津若松市）に到着。ここでも東北地方の大名の配置などの処置を行い、8月13日に同地を発って帰途につきました。^{たじま}会津田嶋（福島県田嶋町）から^{さんのう}山王峠を越えて、宇都宮に一泊、^{とうかいどう}東海道を通り、^{きょうと}京都（京都市）には9月1日に^{がいせん}凱旋しました。

宇都宮では帰途にも、^{しもうさ}下総国^{こが}古河（茨城県古河市）の^{こがくぼうけ}古河公方家（^{むろまち}室町幕府将軍の^{あしかが}足利氏の一族）や^{あわ}安房国^{たてやま}館山（千葉県館山市）の^{さとみよしやす}里見義康などに関する処分を行なったと考えられます。

秀吉が^{おだわら}小田原（神奈川県小田原市）から会津へ向かうにあたって、「会津まで行くことが望ましいが、それが無理ならば、宇都宮までは必ず行かねばならない。」という考えがあったといえます。全国統一の総仕上げとも言うべき関東・東北地方の処置において、なぜ宇都宮がこれほど重視されたのでしょうか。

秀吉が^{かまくら}鎌倉（神奈川県鎌倉市）へ立ち寄った際に、^{つる}鶴が^{あかはちまんぐう}岡八幡宮で鎌倉幕府の創設者・^{みなもとのよりとも}源頼朝の像に「あなたは名門の生まれである。しかし、自分は一介の庶民の生まれであるにもかかわらず、天下をとることができた。」と語りかけたといえます。これは、秀吉が関東・東北地方の支配にあたって、頼朝の業績を強く意識していたことを示しています。

（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

秀吉と二荒山神社

豊臣秀吉は、^{ぜんくねん}前九年の役の^{えき}源頼義^{みなもとのよりよし}や、「^{おうしゅうせいばつ}奥州征伐」のときの^{よりとも}源頼朝が、宇都宮に立ち寄り、二荒山神社に戦勝を祈願したという事実をよく知っていました。

源頼朝は^{ぶんじ}文治5（1189）年奥州征伐のため7月19日に鎌倉を出発、7月25日に宇都宮に到着し、二荒山神社に参拝して戦勝を祈願しました。また、奥州藤原氏を倒して東北地方を支配下に納めた後、平泉からの帰途にも10月19日に再び参拝し、戦勝のお礼をしています。

秀吉も、頼朝の木像と鶴岡八幡宮で対面した後、頼朝と同じ7月19日に鎌倉を出発した可能性が高く、それほどまでに、東北地方の平定に際して頼朝の事績を強く意識していたと考えられます。

「会津まで行けなくても宇都宮までは必ず行く」という秀吉の考えは、関東地方の支配も東北地方の平定も、宇都宮まで行かなければ不可能であるという彼の強い思いに基づいていたのです。（つづく）

「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置と宇都宮城」

発掘調査の結果から

宇都宮城本丸跡（現・宇都宮城址公園）の発掘調査の際，かつてスケートセンターが建っていた場所から，^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物（^{そせき}礎石を用いず，柱の根元を地中に埋め込んで建てる建物）の跡が発見されました。この建物は，非常に太い柱を用いた大きなもので，相当な身分を持った人が使用したと思われます。

ここは^{せんごく}戦国時代には大きな堀があった場所で，16世紀の後半ごろに，その堀を埋めて建物を建てたと考えられます。そして，江戸時代のはじめの17世紀前半には，建物はなくなり，^{どるい}土塁（城を守る土手）が築かれています。つまり，16世紀の終わりから17世紀のはじめの，ごく限られた時期にこの建物が存在していたことがわかるのです。

立派な建物を，一時的とも言える使用のためにわざわざ建てたのはなぜなのでしょう。この建物があつた時期は，^{とよとみひでよし}豊臣秀吉の「宇都宮仕置」と一致します。宇都宮城内には，秀吉が滞在し，東北・関東地方の大名を引見した建物があつたはずで

す。もしかすると，この建物がそのうちの一つだったのかもしれませんが。
(つづく)

宇都宮城跡で発見された掘立柱建物跡

